

## ■ 編集だより

### 編集後記

昨年の夏に、ふと思立って長男と一緒に小旅行に出かけた。「ユースホステル (Youth Hostel: YH)」を使った旅である。YH といってピンと来る人は、昭和生まれの人であろう。YH とはドイツのシルマンがはじめた運動で、若者に安全で安価な宿泊を提供し旅を存分に楽しんでもらおうというものである。そのため、部屋は相部屋で下膳やベッドメイキングは自分で行う。世界各国に YH はあるが、日本の YH はやや独自のスタイルを歩んでいった。その最たるものが「ミーティング」である。夕食後に宿泊者が集會室に集まり、ペアレント (宿の主人) やヘルパー (ボランティアに近い従業員) による観光案内が行われたり、皆で歌を歌ったりゲームをしたり、そしてそのあと語り合うのである。ミーティングが楽しみで YH を泊まり訪ねる人も多かった。昭和 30~50 年代が日本で最も YH 運動が盛んな時期であった。

小学生の頃から YH を利用していた私が、勧誘もされないのに自ら部室に押しかけて大学のユースホステルクラブ (YHC) に入部した頃は、既に日本の YH 運動は斜陽に差し掛かっていた。中流階級が増えて学生もあまり小遣いに困らない世の中で、YH の安さはあまり魅力的ではなくなっていた。少くも値段が張っても、きれいで清潔な設備だと思う学生が多くなった。そのころ、ポケベルや PHS のようにコミュニケーションのツールはどんどん進化していくのに、それに反比例するかのように直接的なかかわりは煩わしいものとなっていた。相部屋は忌避され、日本の YH の特徴であり文化といってもよかったミーティングも次第に行われなくなった。YH 協会や各 YH は食事や設備の改善や工夫に取り組み、飲酒を許可するような YH さえ増えていったが、商業的な宿泊施設に太刀打ちできるはずもなかった。

さて、久方ぶりに YH 会員になったわけだが、その数の減少ぶりに驚いた。以前は、自転車で日本中どこでも YH を結びながら旅行できるほど各地に点在していたのだが、今ではまばらである。時代のニーズに答えられなかったのか。しかし、あの時 YH はホテルやペンションと競うことを考えるのではなく、YH は YH らしく原点に回帰するべきであったのではないかとの思いがある。

精神神経学雑誌は、諸先輩方が試みや工夫を重ねられてこれ、100 巻を超えるに至る歴史を有する。電子ジャーナル化もされ、より簡便にいつでもどこでも読めるようになった。その一方で、原著論文の投稿数が伸び悩んでいる。前編集長が「原著論文のない雑誌は気の抜けたビールのようなものである」と仰ったが、やはり本誌はキレがあってコクがなければならぬ使命があると思う。多くの人が読む雑誌は、その掲載内容が当然のように共有され話題に上る。「何号に載っていた論文ね」という具合に、かつてはそういうところに位置していたが、雑誌が乱立する中でやや埋もれてしまっているところがあるかもしれない。

呉秀三や榎田五郎が残したわが国の精神医学の創成期の記述には、「明治 35 年 2 月に三浦謹之助と呉秀三が発起人となり、精神病理学者、神経病理学者、心理学者など 50 人の賛成を得て、日本神経学会 (現日本精神神経学会) を創立することを発意した。(中略) この会は神経系統と精神生理的・病理的講究を目的として、これに力を添えて助ける医士と他の篤志者を会員とし、隔月 1 回「神経学雑誌 (現精神神経学雑誌)」を発行している (呉秀三著、金川英雄訳・解説 [現代語訳] わが国における精神病に関する最近の施設。青弓社、東京、2015)」とある。本誌は、臨床、研究、教育を問わず、精神医学に携わりその発展を願う「全ての者の手」で作られ、そして「皆に読み親しまれる」雑誌であるべきことを改めて思うのである。

本誌の原点に立ち返りつつ如何なる充実と発展を目指すべきか、編集委員としてもっと真剣に考えてその責務を果たさねばと、20 年ぶりの YH 会員証を見ながら自省している。

根本隆洋